

尾州有楽流 教本

【中級編】

茶花と花入の基礎知識

« 季節の茶花 »

① 春

* 寒牡丹

格式：非常に格が高い・濃茶向き

よく古木と合わせて入れる

開花した姿は華やかに過ぎるため、茶花では蕾の状態で入れることが多い

* 椿

格式：概ね格が高いが、品種にもよる

中輪・大輪の品種は開花した姿は華やかに過ぎるため、蕾の状態で入れることが多い

* 椿の代表的な品種

侘助（わびすけ）

白侘助

太郎冠者（たろうかじや）（「有楽」とも）侘助系

曙（あけぼの）

西王母（せいおうぼ）

加茂本阿弥（かもほんあみ）

白玉（しらたま）

妙蓮寺（みょうれんじ）

蘿椿 ※ありきたりなので茶花に入れることは少ない

* 梅（紅梅・白梅・蠟梅（ろうばい）など）

格式：高い

今は単体では入れず椿などの添えの枝として入れることが多い

* 水仙

昔は舶来の珍しい花だったが、今は容易に入手でのあまり有り難がられない

* 桃

菜の花（千家系で利休忌に桃と菜の花をよく入れる）

* 牡丹

格式：非常に格が高い・濃茶向き

開花した姿は華やかに過ぎるため、茶花では蕾の状態で入れることが多い

② 夏

* 大山蓮華（おおやまれんげ）

格式：高い・濃茶向き

*山芍薬（やましゃくやく）

格式：高い

※普通の園芸種の芍薬は容易に手に入るので有り難がられない

*カキツバタ

*あやめ

*花菖蒲

*紫陽花（あじさい）

額アジサイのような大型品種は不向き

*鉄線

*木槿（むくげ）

真夏の茶花の代表。入れ方により、格式高くもカジュアルにも使われる

品種として、底紅の宗旦木槿や、白一色の祇園守など

*芙蓉（ふよう）

*朝顔

代表的な夏の茶花ではあるが、昼には萎んでしまって茶会に使われることは少ない

*薄（ススキ）

矢筈ススキや糸ススキなど

木槿など主となる花に添えるものとしてよく使われる

*半夏生（はんげしょう）

*そのほか、籠花入などに数種を取り合わせて入れる花として、虎の尾・都忘（みやこわすれ）・螢袋（ほたるぶくろ）・水引（みずひき）などなど

③ 秋

*秋明菊（貴船）

格式：椿などには劣るが、割と高い。秋明菊一種で入れられる。

*ホトトギス

*そのほか、籠花入などに数種を取り合わせて入れる花として、桔梗・吾亦紅（われもこう）・女郎花（おみなえし）・藤袴（ふじばかま）などなど

*万作などの照り葉（モミジに限らず紅葉した葉のことを照り葉といい添えの枝としてよく使う）

④ 冬

*椿：既出

*水仙：既出

*寒菊

« 茶花の選び方の基本 »

- 「茶花は時（とき）の賞翫」という言葉がある通り、その時の季節感や時間経過を感じられる花を選んで入れるのが基本。なので、花屋でいつも売っているスプレー菊や、ずっと変わらず咲いている胡蝶蘭などは、茶花には相応しくない。
- 花屋で普通に売っている花は、たいてい園芸種で屈強に過ぎ、茶花には向かないものがほとんど。要は、「山野草」と呼ばれるものが良い。
- 山野草はすぐに枯れてしまうものが多く、だからこそ時を賞翫する茶花にピッタリであるが、そのぶん、入手することが難しい。
- 山野草専門の業者から入手する以外では、苗を買ってきて自宅で栽培するか、野に咲いているものに目星をつけておいて使うときに採取するしかない。

- 茶花は、一種のみを入れるのが一番格調高く、二種・三種と数が多くなるだけ格が下がる。もっとも、広間の場合では、一種ではさみしいので、格調高く入れる場合でも二種入れることが多い。
- 花に合わせて、格の高い花（たとえば牡丹など）を一種のみ格の高い花入（たとえば古銅や青磁の花入）に入れることもあるし、逆に花入に合わせて、カジュアルな花入（たとえば和物の籠）に数種類のカジュアルな花（たとえば桔梗・吾亦紅・藤袴・女郎花・ススキ）を入れる。茶会の趣旨に合わせて、花や花入の格も合わせて選ぶこと。

« 花入 »

①金属系

* 古銅（胡銅）

* 砂張（さはり）

* 唐銅（からかね）

* 青銅（青銅経筒花入）

(※古銅・砂張・唐銅の順に格が高い)

- 金属系はそれだけで総じて格が高いが、中国・明代など古いものが格が高い（青銅経筒は和物なので除外）。また、模様が少なく、美しい形をしているほうが格が高い。

- 矢筈端の薄板など格の高い薄板や盆にのせる。

- 花も格の高い花を一種か二種、入れる。

- 格の低い花を入れるのや、三種・五種と盛り盛りにするのはダメ。

②磁器系

* 青磁

- 古来から珍重されてきたもので、古銅に匹敵するほど格が高い。
- 中国・竜泉窯の青磁が茶の湯では最も好まれており、とりわけ南宋時代の作品を指す「砧手」は最上。なお、価格は古銅よりもはるかに高い。(南宋より前の、北宋青磁はお茶ではまず使わない。南宋でも竜泉窯ではなく南宋官窯の作であれば砧手以上の格式を持つ)
- 元時代の「天竜寺手」、明時代の「七官手」と、時代が下るに従って品質や美術的価値が下るので格も下がるが、七官手といえどもスポーツカーくらいの値段はするので、格が高いことに変わりない。
- 近代以降は容易に青磁の焼成が可能になったので、「七官手」にもならない近年の青磁は、ポリエステル製の燕尾服のようなもので、あまり使い道は無い。毎年恒例の忌日法要など、きちんとなきなればいけないけれどもそこまで重くない茶席に、名の通った青磁作家の作品を使うくらいか。

*染付

- 白生地にコバルト（呉須）で絵付けをし、透明釉をかけて焼成したもの。中国・明時代のものが最上。特に最大の産地であった景德鎮のものがよい。青磁には及ばないものの、高い格式を持つ。
- 景德鎮の民窯（国立の官窯以外の民間運営の窯）製で、端の方の釉薬が途切れているものは、中国では出来損ないだが、日本では「茶味がある」として、無上に喜ばれる（※格が高くなるわけではない）。
- 首の部分にオジサンが描かれ、その横に鯉形の耳がついた作品は「高砂手」と呼ばれ、非常に人気がある。
- 染付も青磁と同じく、近年は非常に安価に大量生産できるようになったので、茶会等で使うのであれば少なくとも名の通った染付作家の作品を使いたい。
- 景德鎮以外の、とくに南方系の窯で焼かれた染付を「呉須」と呼ぶ。
- 青磁以外の焼物の花入は、たとえば蛤端の薄板など、青磁で使うものより一格下がる薄板を敷くのがよい。（焼物であっても無釉であれば更に格の下がる板を敷く）

*色絵

- 白生地を先に焼成して、それから絵付けを施した(この技法を上絵付けという)もの。
- 赤が多く使われたら赤絵と呼び、金泊が焼き付けされた金襴手と呼ぶ。これらも中国・明代のものが最上で、近年のものになると、ポリエステルのタキシードのような感じで、やはり使い道に困る。とりわけ色絵の花入は、花を入れても花と花入が喧嘩することが多く、花入ではあまり使われてゐるを見かけない。赤絵や金襴手には牡丹を入れるくらいか。

③陶器系

- 花入として使うには、無釉の焼き締め陶がなんといつても花がよく映るので、頻繁に使われている。施釉のものはあまり花が映らないので、使う機会は限定される。とはいえ、

無釉と施釉では、施釉のほうが格は高い。

○施釉の花入としては、千利休が掘り出したという黄瀬戸の立鼓形（久保総記念館蔵）が有名。

○無釉の焼き締め陶としては、なんといっても六古窯の一つの備前焼が好まれ、近年では六古窯の他の丹波・常滑・信楽、など好まれる。（丹波など江戸期になると施釉陶が焼かれたのでそういったものは用いず、室町期か近年に無釉陶の焼成が復興してからの作品を用いることが多い）

○六古窯ではないが、桃山期の伊賀焼、特に古田織部好みのものは無上に喜ばれる。

○日本以外でも、ベトナムあたりで焼かれた無釉陶も「南蛮」と呼ばれて喜ばれる。

○こういった無釉陶は、木地板にのせ、板も花入もしっかり濡らして使う。

○もちろん掛け花入にできるのであれば、掛けて使っても良い。

○基本的に和物の陶器は桃山期のものが最も格が高い。格が高いといつても、侘びの茶（小間の茶席など）で、侘び茶としての格調が高いという意味。広間で使うなら古銅や青磁の花入の正統的な格の高さには及ばないので、桃山期のものを使ったとしてもカジュアルな、くだけた雰囲気になる。

④竹

○竹花入も、無釉の焼き締め陶に劣らず花がよく映えるので、非常に頻繁に使われる。

○しょせん竹で作ったものなので、非常にカジュアル。もっとも、利休作とかそのくらいの古いものならば、小間で使う侘び茶の花入として非常に格が高い。

○小間茶席の床の間の壁には、壁中央に釘が打ってあることが多く、この釘に花入を掛け飾ることを「向こう掛け」という。（向こう掛けをするときは掛け物は掛けない・掛けられない）

○竹花入はもともと千利休によって向こう掛け用の花入として創出されたもの。後に藤村庸軒によって、置きの竹花入が創出された。なので歴史的経緯から見ても、掛け花入のほうが格が高い。

○向こう掛けの釘は広間の床の間に打ってあることもあるが、小間の侘び茶を広間で行なうためのもので、普通はあまり使わない。広間では普通に掛け物をかけて、その前に花入を置く。

○掛け花入としては、床の間の床柱に打ってある花釘に掛けることもままあるが、同じ掛け花入といつても向こう掛けに対してこの床柱の花釘に掛けるかたちは、花・花入が完全に掛け物の引き立て役になるので、非常にカジュアルな扱いとなる。

○サラッとした茶席には良いが、例えば利休作の竹花入を床柱の花釘に掛けるなんていうのは、ただただ不見識としか言いようがない。

○竹の種類としては、細い竹を細長く切っただけの「尺八」、普通サイズの竹の上下を切っただけの「寸胴」、寸胴の上部に窓をあけて最上部に輪が残った「一重切（いちじゅうぎ

り)」、窓を二つあけた「二重切（にじゅうぎり）」など、さまざまある。

○一重切の場合は窓から花を入れる。寸胴のように真上から入れるということはまずしない。二重切の場合は、どちらの窓に入れるだとか絶対的な決まりはないが、下の窓にだけ入れるのが現在の主流。

○竹の種類は、真竹を油抜きした白竹が多いが、改まった席では（とくに正月の茶会）では切ってすぐの青竹のままで使うことも多い。なんでもないのに青竹を使うのは、変である。

○竹林を探しまくって、半枯れ色変わりの竹を見つけて使うこともある。胡麻竹、煤竹などいろいろ使うが、孟宗竹は時間経過で汚く色がさめるし竹自体の質も粗いので、あまり使わない。

○竹花入を置きで使う場合の敷板(薄板)は、黒塗りの板では格が高くて合わないので、溜塗りの板か、似合えば木地板を使う。長方形の板では大きすぎる感があるので、丸い薄板あたりが適當かと思われる。その竹花入との見合い次第。

⑤籠（籠）

○籠花入も、焼き締め陶や竹に劣らず花がよく映えるので、頻繁に使われる。總体に軽やかな見た目なので、風炉の時期に使われることが多い。

○籠花入自体は決して格の高いものではないが、古い中国製（いわゆる唐物）は、編みが神技級に細かいので、格の高い花入として扱われる。

○概して、編みが細かいほど格が高いし、粗いほどカジュアルである。

○また、手付き(持ち手が付いている)のほうが格が高い。

○唐物籠には牡丹を一種入れたりするが、和物の籠花入にはもっとカジュアルな花を数種類入れることが多い。